随想「2021 年９月」　理事長 鳩山由紀夫

コロナのパンデミックが勢いを増している中で、東京オリンピック・パラリンピックが開催された。私は福島原発事故後の放射能汚染がアンダーコントロールであると世界に高々と宣言して招致した東京五輪であっただけに、そしてその後も不祥事続きであっただけに、東京五輪の開催を素直に喜ぶことは出来なかった。復興五輪と銘打ちながら、結局は五輪の開催のために復興予算も削られて、福島も忘れられてしまうことになるのではないかとも危惧している。

東京が最も暑い時期にスポーツ大会をすること自体が、選手たちにとって悲劇的であったが、これは日本に責任があるというより、アメフトの時期を外せとの米国メディアの要求であった。したがってこれは米国の責任であるが、一国の事情で最適な試合環境を与えることができなかったことは、アスリートたちは商業主義化した五輪の被害者であったことを意味していた。商業主義化したということでは、日本のメディアも日本選手がメダルをいくつ取ったと、日本選手の活躍ばかりを追っていたようであるが、そのことに違和感を覚えた方々も多かったのではないだろうか。なぜオリパラを東京に招致したのか。それは世界から多くの著名なアスリートを招き、彼らの活躍を見ることができるからではなかったのか。それならば、メディアも日本選手ばかりを追うのではなく、友愛の精神を発揮してもっと世界から招かれたアスリートの活躍を報じてほしかったと思う。

私はとくに世界の平和の祭典である五輪期間中くらいは平和であってほしいと願っていたが、その願いは叶わなかった。それは 8 月中にアフガニスタンから米軍を完全に撤退させると約束したバイデン大統領の言葉から始まった。アフガニスタンで多くの米軍兵士の命が奪われていたため、アメリカの人々の間には厭戦気分が横溢していた。だから多くの米国民はバイデンの米軍撤退の決定を支持した。アフガニスタンの未来はアフガン人が決めることになるとしたら望ましいことではないかと私も期待した。ところが、話はそう単純ではなかった。米軍が撤退を開始した途端に、タリバンがアフガニスタンの多くの地域を制圧して、首都カブールはあっけなくタリバンの手に落ちて、ガニ大統領は逃亡してしまったのだ。それは予想される事態でもあったが、こんなに早くタリバンが制圧するとは予想以上であった。タリバンの支配を恐れた多くの外国人やアフガン人は一斉にカブールを離れた。この混乱に乗じて、同じイスラム系でもタリバンとは相容れない IS がカブールの空港近くで自爆テロを行ったのだ。この自爆テロで 180 人以上の方が亡くなり、米兵も 13 名含まれていた。自身の判断で撤退を開始した結果、多くの米兵が亡くなることとなり、面目を失ったバイデン大統領はすぐに報復措置を取り、ドローンにより自爆テロの関係者と思われる IS を２名殺害した。この瞬間、IS　vs　米軍の戦闘が開始されたのである。バイデンの怒りは収まらず、米軍はカブールで空爆を行い、子ども数人を含め民間人 10 名が巻き添えとなって亡くなった。また、カブール空港に向けて数発のロケット弾が発射されたが、ミサイル防衛システムによって迎撃されたと報道されている。アフガニスタンの駐留米軍の撤退は完了したが、未だに数百人の米国人が残されたまま退避作戦が終了したため、戦闘行為を含めて今後も大きな混乱が続くものと予想される。アフガン戦争は終幕を迎えたと言われるが、2001 年の 9.11 以後にスタートしたアルカイダ掃討作戦としての米国の史上最長の戦争は結局何をもたらしたのだろうか。

私はその 9.11 から３か月経ったクリスマスの後に、首藤信彦衆議院議員とともに、タリバン政権が崩壊して暫定政権がスタート直後のアフガニスタンを訪れた。首都カブールは 23 年間の内戦で建物の多くは完全に破壊されていた。日本大使館も廃墟となっており、小さな連絡事務所の現状を視察した。カブールに入る直前に隣国パキスタンのペシャワールで NGO 会議を開催して、アフガニスタンの教育、女性の地位向上、産婆教育、職業訓練、医療衛星などに取り組んでいる NGO の活動報告を聞いて、彼らに対して支援を行ってきた。カブールでは大統領になる前のカルザイ議長と面談した。カルザイ議長には、アフガニスタン復興のためには、すべての民族の協力が必要なことや民主的な手続きで政権を樹立してほしいことなどを伝え、翌月に開かれる予定の東京会議にはぜひあなた自身が出席してほしいと強く求めた。議長は、東京会議には出席を決め兼ねていたが、あなたが言うなら決心したと述べてくださった。実際に東京会議にはカルザイ議長自らが出席して、大きな成果を収めることができたと思っている。カルザイ議長は、トヨタのランドクルーザーのお蔭で、道なき川伝いを逃れることが出来て助かった、日本の車には感謝しているとの言葉もあった。また、カブール付近の村で地雷回避教育の現場を見学し、その後地雷除去の NGO が行っている地雷除去作業を視察した。地雷の爆破の轟音はすさまじかった。爆破の度に、これで平和に向けて一歩近づくのではないかとの期待感を持った。しかし、頭上を眺めれば、北爆に向かう米軍機が飛んでおり、平和のために人殺しをすることがあり得るのかと不安にもなった。

今、その頃のことを思い返して、タリバン政権崩壊後の 20 年間は一体何であったのかと、実に寂しい思いである。アフガニスタンの復興に日本も力を貸してきた。タリバン時代に虐げられていた女性たちに教育の機会が与えられて、人権意識も向上してきた。今後、タリバン政権が復活して、女性たちの人権はどうなっていくのだろうか。IS や地方の豪族たちとの戦闘は収まらずに、カブールはもちろん地域の復興は停滞するのではないだろうか。心配は絶えない。

古の時代から今日に至るまで、戦争がなくなることはない。なぜ人間はかくも愚かなのか。憎しみが憎しみを生む、憎しみの連鎖が戦争に発展する。憎しみがなくなることはないが、憎しみの連鎖を断ち切らなければいけないのだ。憎しみの連鎖を断ち切るのにはどうすれば良いか。やられたらやり返すのではなく、より恵まれたほうがやり返さないで我慢することであろう。ではどうしたらそれが出来るか。それは自己の尊厳を高めつつ、相手の尊厳をも尊重する精神を持つことである。相手が自分と違っていることを認めて尊重し、信頼をして、必要ならば助け合うことである。それが友愛の心である。世界の指導者たちが友愛の心を持つことになれば、決して二度と戦争は起こらない時代を迎えることができよう。

友愛が縁あって農業技術者育成支援活動を行っているミャンマーも情勢が混沌としている。

私たちは何ができるのか、真剣に考えなくてはいけない。

友愛精神を広めるために、私たちは急がなくてはならない。

写真左
カルザイ氏（当時はまだ大統領でない）との会談

写真右
地雷現地調査、指の先の緑のプラスチックがその一部（➡〇の箇所）

題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」
発行所
公益財団法人 友 愛
〒112-0002
東京都文京区小石川1-10-13 小石川文天ビル２階
TEL:03-5684-3188
FAX:03-5684-3186
E-Mail:you-i@yuai-love.com
http://yuai-love.com
編集人：羽中田元美
隔月１回　10日発行
会　費（4月～3月）
個人／ 3,000円以上
法人／10,000円以上

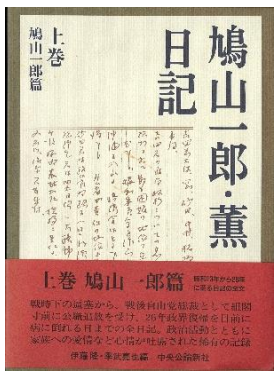
友愛時評

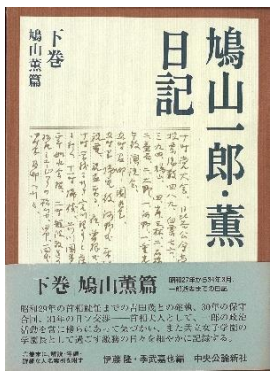
▼先月十五日、反政府武装勢力タリバンが首都カブールを制圧し、アフガニスタン情勢は一気に悪化した。二四日に現地に向かった自衛隊機はわずか一人の邦人しか乗せることができず救出作戦は大失敗に終わったが、その経緯の詳細が明らかになるにつれ唖然とするばかりであった。▼他の用務でアフガニスタン国内にいなかった岡田隆大使は、カブール陥落当日に大使館を閉鎖し、二日後には大使館員十二人を英軍機に同乗させて退避させた。現地での情勢把握や救出作戦に必要な連絡業務ができなくなり、民間邦人やＪＩＣＡの現地スタッフとその家族ら約五〇〇人には、カブール空港まで自力で来ることが求められた。だが、大規模な爆破テロにより、移動を断念せざるを得なかったという。▼現地の混乱ぶりからすれば、非常に難しい救出作戦であったことは間違いない。しかし、一時退避した大使館員が現地に戻り、関係するアフガン人とその家族三九一人を無事に救出した韓国との差は歴然である。その後、日本大使館の現地職員からは、カブール陥落の危険を幹部に進言したが無視されたことや、メディアへの「口止め」を命じられた、という報道まで出てくる始末である。▼二〇年以上前に在外公館に勤務していた折り、わが国の外務省が現地職員を軽視する姿勢には強い違和感を覚えたが、全く変わっていないようだ。現地職員は日本外交にとって重要な人材である。「邦人保護」にはあたらないとしても、彼らを見殺しにすれば、今後一体誰が我々と共に働いてくれるのか。こうして、「国益」は確実に害されている。

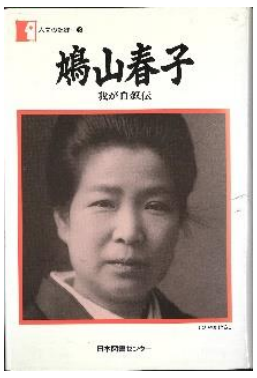
（ヒゲ）

友愛ほんだなご紹介

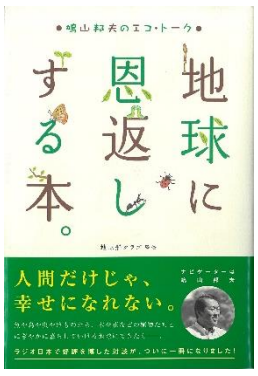
――友愛事務所蔵書のご案内――

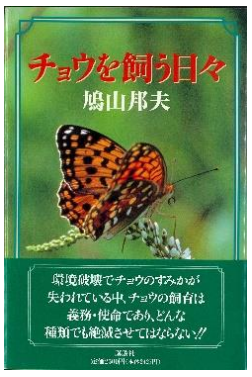


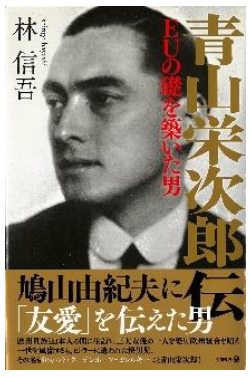




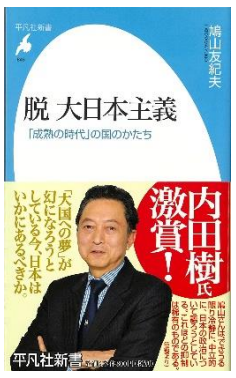
組閣寸前の公職追放、家族への思いなど、時代とともに生きた鳩山一郎像が本人の言葉で綴られた貴重な書（表⑥）日ソ共同宣言のための渡航に同行、激動の時代に生きた夫鳩山一郎を間近で見続けてきた鳩山薫の日記に、日本の歴史が刻まれている。（表⑦）鳩山一郎の母、教育者として生涯を強く生きた女性の自叙伝（表⑤）鳩山一郎が後に妻となる薫に宛てたラブレター（表③）

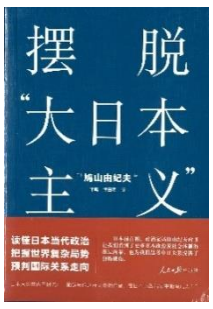






「自然との共生」を友愛の理念に、地球環境の保全を訴え続けた鳩山邦夫の著書二冊（表②、⑨）友愛理念の礎を唱えたクーデンホーフ・カレルギー伯は、日本生まれ。EU の祖をジャーナリストが描きだす（表⑩）直木賞受賞の著者が記者の目で描く鳩山一郎像。文庫化もされた人気の書（表①）





副題の「成熟の時代の国のかたち」が示す通り、豊かさを追い求め続けることへの警鐘を鳴らす話題の書。中国語版も出版されている（表⑪）「尊厳ある日本を創る」を副題に掲げ、著者の現行憲法に対する考えを綴った書。2005 年に出版された（表⑧）今年出版された鳩山一郎研究の書。各界の専門家が資料を紐解き、歴史の中の鳩山一郎を浮き彫りに。都道府県立図書館蔵書（表⑫）

東京都文京区小石川にある公益財団法人友愛の事務所には、その歴史と共に歩んできた数々の資料が保存されています。
資料のみならず、永い歴史を彩るように、多くの書籍も所蔵されています。

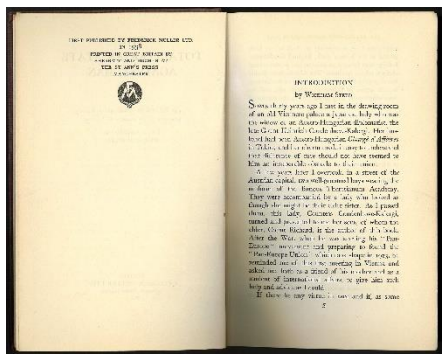
今回はその蔵書の中から一部をご紹介し、友愛の理念がどのように育まれてきたのか、そして友愛の創設者鳩山一郎先生の想いは、いかなるものであったのか、などなど思いを巡らせていただけましたら幸いです。友愛活動を続けて行く上での、有意義な資料としても、お役に立つのではないでしょうか。
秋の夜長、読書に耽るのもよいものです。
ご紹介した書籍は、すべて国会図書館の蔵書になっています。
今回写真と共にご紹介した蔵書の他にも、数々の書籍があります。
（クーデンホーフ・カレルギー全集・美術関連書籍・明治大正昭和初期に発行された文学書初版本の復刻版等々）
また、活動記録（友愛ドイツ歌曲コンクール・中国における植林活動・ミャンマー農業指導者育成事業・OEJAB との交流・友愛国際写真コンクール・友愛周年事業等々）も写真と共に揃っております。

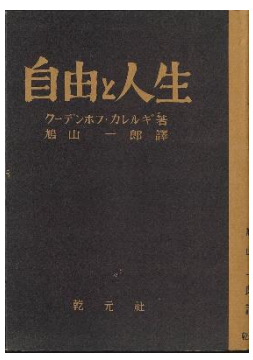
＊ご希望の方は、閲覧可能です。事務局までお申し込みください。
（蔵書・写真資料の閲覧は、公益財団法人友愛の会員に限ります）

蔵書リスト（写真掲載分／写真の説明文はいずれも写真左から）

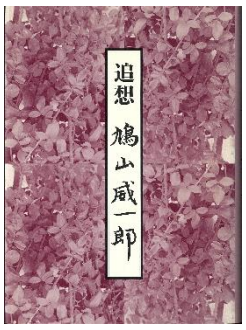
写真	書　名	著　者	発行日	版型	頁数	出版社	監修・編集　他
①	鳩山一郎　英才の家系	豊田　穣	1989 年 2 月 27 日	四六版	558	講談社	
②	チョウを飼う日々	鳩山邦夫	1996 年 4 月 15 日	四六版	321	講談社	
③	若き血の清く燃えて	鳩山一郎	1996 年 11 月 6 日	四六版	238	講談社	川手正一郎
④	追想　鳩山威一郎	（鳩山会館）	1996 年 11 月 30 日	菊版	254	角川書店	鳩山会館
⑤	鳩山春子　我が自叙伝	鳩山春子	1997 年 2 月 25 日	四六版	266	日本図書センター	人間の記録３
⑥	鳩山一郎・薫日記（上巻）	鳩山一郎	1999 年 4 月 1 日	四六版	784	中央公論新社	伊藤隆・季武嘉也
⑦	鳩山一郎・薫日記（下巻）	鳩山　薫	2005 年 3 月 25 日	四六版	936	中央公論新社	伊藤隆・季武嘉也
⑧	新憲法試案　尊厳ある日本を創る	鳩山由紀夫	2005 年 2 月 21 日	Ｂ５版	254	PHP 研究所	
⑨	地球に恩返しする本　鳩山邦夫のエコ・トーク	鳩山邦夫	2006 年 7 月 25 日	四六版	255	ポプラ社	地球船クラブ
⑩	青山栄次郎　EU の礎を築いた男	林　信吾	2009 年 12 月 10 日	四六版	324	角川書店	
⑪	脱　大日本主義　「成熟の時代」の国のかたち	鳩山友紀夫	2017 年 6 月 15 日	新書版	248	平凡社新書	2020 年中国語版出版
⑫	鳩山一郎とその時代	（増田　弘）（中島政希）	2021 年 3 月 10 日	Ａ５版	472	平凡社	増田　弘　中島政希

貴重な書籍もあります





孔子第 77 代子孫　孔徳墉先生から頂いた、孔家公認の『論語』（写真左）
クーデンホーフ・カレルギー伯が著した『The Totalitarian State Against Man』 の初版本（写真中央）
カレルギー伯著　鳩山一郎訳『自由と人生』初版本　友愛思想の原点となる書籍（写真右）



没後三年を機に出版された本書は、貴重な写真と共に寄稿文、座談会など多方面から鳩山威一郎を浮き彫りにしている。当時発行の友愛も特集を（表④）

編集後記

公益財団法人友愛は、再来年の二〇二三年四月には創立七〇周年を迎えます。記念事業の一つとして、年表をまとめています。その作業の中で、確認すべき出来事が見つかると、事務所に保存されている資料、写真、書籍などを調べ確認していきます。そうした作業の中で、「ああ、こんなこともあった…。こんなところにも訪問した。」などと、懐かしい記憶がよみがえって、資料を読み　耽ってしまうことがあります。「温故知新」これからの友愛活動に役立てるために、年表作成も大切な作業だと思いました。（も）

お知らせ

機関紙『友愛』第 572 号は、特別編成で作成いたしました。
新型コロナウイルスの影響を受け、国際交流事業など活動を思うように進展させることができない現状です。それでも理事会を中心に、協議を重ね可能性を探り、実施に向けての準備を進めております。
機関紙『友愛』の紙面で、早く活動報告ができるようになる日が来ることを祈りつつ、特別編成号をお届けいたします。